

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

近藤 菜月

論 文 題 目

社会変動と行為者  
— 「革命」期のガーナ農村部における民衆運動を事例として—

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 山田 肖子

委員 名古屋大学(教育発達科学研究科)

教授 大谷 尚

委員 名古屋大学 准教授 上田 晶子

委員 名古屋大学 教授 西川 由紀子

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、「国家主導」の開発観が支配的なアフリカにおいて、「上からの近代化」でも「伝統主義」でもなく、草の根の行為者が、環境に意味づけし、働きかけ、創造する行為とその相互作用を「内発的」な社会プロセスとし、その過程を立体的・複合的に捉えることを目指している。そして、このような「内発的発展」は、外部者の視点ではなく、内部者の主体的意味づけと社会コンテキストに根差した運動としてとらえることで初めて把握することができる、との問題意識に基づき、北部ガーナの内発的発展の萌芽が見られた 1980 年代の革命期の民衆運動に着目している。本研究の目的は、この民衆運動を、ガーナのなかで歴史的に「周縁」に位置づけられてきた北部の農村地域における民衆の主体性の高まりと捉え、この運動が人々にとってどのような意味をもっていたかを、当時活躍した「行為者」の視点から探索することである。

本研究は、社会を制度や構造としてではなく、アクターの主体と歴史の中でとらえる「行為主義」的アプローチを採用している。このアプローチでは、「革命」期のポピュリズム的現象を「上からの煽動」としてではなく、「下からの運動」として捉え、首都を中心に起こった革命の「呼びかけ」に対する民衆の「主体化」の動きを捉える。同時に、集団としての民衆運動の形成、展開のプロセスにおけるアクターの関係性に重点を置き、「行為者」の概念を個のアイデンティティと関係性の中でとらえ直すことを目指している。

調査は、ガーナ北部 3 州の 1 つであるアッパーイースト州で、当時民衆組織のメンバーとして運動に関わった人々を対象とし、8 地区中 5 つの地区で計 46 人に対するフォーカスグループを実施した他、15 名あまりに対し、複数回にわたる詳細な個別インタビューを実施した。フォーカスグループにより、民衆運動の全体状況を把握したうえで、個別インタビューは、ライフヒストリー手法によって分析を行っている。

論文は 7 章からなり、第 1 章、2 章では、研究の背景・目的、社会運動に関する先行研究を整理し、第 3 章では、調査手法を詳述した。4 章以降では、フィールドワークからのデータに基づく分析が提示された。まず、第 4 章では、コミュニティの権威主義的關係における社会的閉塞を打破しようと青年層が台頭していった背景、過程を描いた。第 5 章では、3 名の人物に焦点を当て、それまで孤立して伝統的コミュニティに埋没していた青年層が、民衆組織を通して全国的なネットワークとの繋がりを得たことで、革命という枠組みの中で地域づくりをしていったことを示した。それまで他との繋がりが社会的文脈を持たずに「原子化」された状態で伝統的コミュニティに埋没していた北部農村部の青年らは民衆組織を通して全国的なネットワークとの繋がりを得、同時に、そうした青年らを媒介として、遠いアクラで起こった政治変動は、北部農村部の主体的な地域作りのための枠組みとして民衆によって活用された。第 6 章は集合行為としての革命が一定の成果を得つつ終息に向かうなかで、個々の活動家の主体性とのズレが生じ、各個人の中で経験が再解釈され、異なる人生選択がなされたことを説明する。終章は、本論のまとめとして、北部ガーナの青年運動が、既存のシステムから逸脱し、社会変革を試行しつつ新生ガーナの市民として再統合されたと述べている。しかし、こうした社会現象と行為者の相互作用による現象の再定義、再構築は絶え間なく起きており、発展のための変革が常に下から起きていると指摘している。

なお、本博士論文のテーマに関連した論文は、既に『国際開発フォーラム』に単著で掲載されている。

## 論文審査の結果の要旨

### 2. 本論文の評価

本論文は、学位論文として以下の点が評価される。

- 途上国のフィールドワークに基づく研究は、「情報の希少性＝論文の独自性」と認識されがちであり、フィールドでの情報収集の熱意と根気は十分評価されるべきものであるとともに、綿密な理論研究や精緻なデータ解析という点では課題が残る場合も少なくない。しかし、本論文提出者は、現地ラジオ局も巻き込んで革命期のリーダーから直接話を聞き取るという行動力と粘り強さに加え、社会学における社会運動論を詳細に検討し、当該分野の既存研究ではほとんど取り上げられていない途上国農村部の事例から理論的貢献を試みようとしている。
- 詳細なライフストーリーの聞き取りに基づく定性的データを丹念に分析し、4～6章では、生き生きと読者をひきつける文体で革命参加者の語りに基づく民衆運動の有り様を描き出している。
- 首都で起きた政治革命を社会運動論の枠組みでとらえることの限界を指摘し、活動に参加した行為者の主体性を軸に革命言説の脱構築を図った。そのことにより、従来の定型化されたガーナ社会における革命の意味や影響に関する定説に一石を投げようとしている。
- 西欧的な「開発」モデルが外から当てはめられる「途上国」という周縁の中に、首都ー遠隔農村部、伝統的権威者層ー若者層といった複数の「中心ー周縁」関係が存在したことを明らかにし、「革命」運動を主体的に取り入れることで、中心と周縁の関係が逆転するなど、相対的かつ流動的な関係性が存在したことを示唆できている。

ただし、本論文は、以下の点において改善すべき点があることが指摘される。

- 理論化を試みていることは十分に認められるものの、論文の序盤で提起した「内発的發展」や「社会運動」に関する先行研究の限界に対し、結論部分で引き取ってまとめることが十分にできていない。若者のライフストーリーを描き出すあまり、「革命」への参加と「革命」終焉後の疎外を、主体的行為の中で説明することに終始してしまい、集団としての運動やその解釈につなげきれなかった。
- 「中心ー周縁」の流動化という極めて重要な分析を提示している一方、女性や年齢層の異なる人々にもインタビューしていながら、農村の中にあっただろう行為者間の「中心ー周縁」関係に十分踏み込めていない。
- 歴史上のある時点におけるガーナの北部農村の若者の事例であることの特殊性、一般性が十分に示されておらず、この事例であるべき必然性やここから抽出できる社会運動に関する一般的示唆は明確ではない。

このように、分析の踏み込みや整理に関しては、課題が残るものの、ライフストーリーの分析・提示や理論との接合に関して、優れた点が多々見られる。このことから、本論文は、博士論文として期待されるレベルには十分に到達していると判断される。

## 論文審査の結果の要旨

### 3. 結論

以上の評価により、本論文は、博士（国際開発）の学位に値するものであると判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。